

2009.9.16 (水)

白内障患者58人手術

徳島大病院・内藤准教授に聞く

白内障で失明する人が多い、アフリカ南東部モザンビークの眼科医療支援のため、8月21日から10日間、徳島大学病院眼科の内藤毅准教授(54)が現地を訪問した。昨年6月に続き2回目の医療支援訪問。帰国した内藤准教授に話を聞いた。

支援のきっかけは。 容は。

モザンビーク政府の要請。白内障患者の手術と、現地で眼科医育成が目的。Nで2007年8月に同国を訪問した。強い紫外線や栄養不足で年間20万人が失明の小村ムエタで3日間滞在した。技術を伝えるため、首都・マプトの女性研修医2人にも同行してもらった。病院の1室を借り、重症の白内障で、両目が見えない58人に手術をした。持参した眼科手術用顕微鏡を使い、目の中に人工眼レンズを入れる手術だ。



内藤毅准教授

しているが、医師を育てる教員は少ない。昨年5月、非政府組織(NGO)「アフリカの眼科医療を支援する会」を設立し活動を始めた。今回の訪問、支援の内



現地体制充実へ活動継続

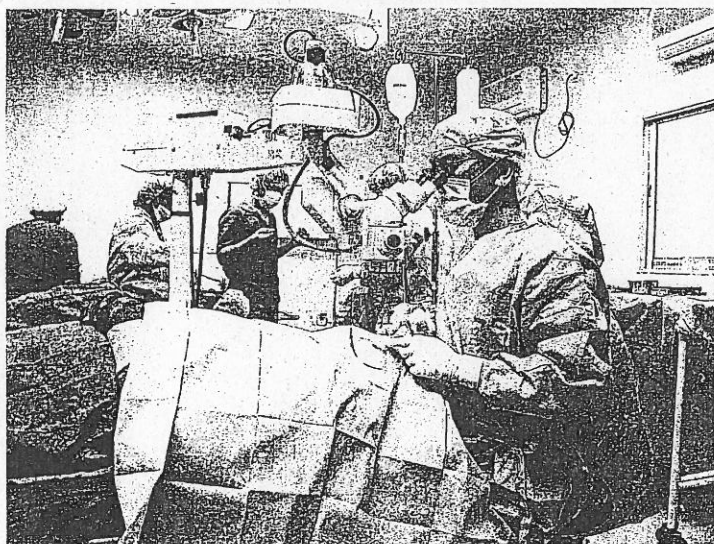
准教授(54)が現地を訪れた。昨年6月に続き2回目の医療支援訪問。帰国した内藤准教授に話を聞いた。

荒井助教と交代しながら毎日午前9時から午後7時まで手術。物資が少なく、交代している間も次の手術に使う医療器具の消毒や準備に追われて休みはなかった。中には目を閉じたり体を横にしたりして嫌がる患者も。そんな時は助手の研修医が現地の言葉で声を掛け、患者の不安を和らげてくれた。

手術を受けた患者の様子は。滞在最終日に、手術を終えて入院中の患者を回診した。術後1日たてば見えるようになるため、光を取り戻したうれしさに何人も患者が「1人で歩ける」「一生見えないと思っていた」と飛び上がって喜んでくれた。視力が回復してくる人のために日本から持参

した100個の中古眼鏡も好評だった。今後の計画は。助手の経験を通し、手術の手順や執刀医と助手の連携、技術などを勉強してもらいたい。

NGOへの入会や寄付の問い合わせは、徳島大学医学部眼科分野へ電088(633)7163。



白内障患者の手術をする内藤准教授
ムエタの病院(内藤准教授提供)

モザンビーク眼科医療支援 8月21日から10日間訪問